

獅子門の句碑、琵琶湖疎水

東の琵琶湖疎水から流れ込むこの小さな滝は、32人の俳人の詩石で囲まれている。それぞれの石には、俳諧の美濃派（後に俳句と呼ばれる）の俳人による句が刻まれている。これには、松尾芭蕉（1644～1694）の世界的に有名な句「古い池や かわずとびこむ 水の音」も含まれている。6つの詩石は、1806年に各務支考（1665–1731）によって確立された伝統の詩人芭蕉の協会である獅子門（または美濃派）の仲間によって最初に建てられた。蕉門十哲の一人である支考は素晴らしい分析力を持っていて、芭蕉の死後、彼は広範囲に旅をし、芭蕉俳句のスタイルの認識を広めた。これらの最初の記念碑から始まり、その後数年間、獅子門のさまざまな仲間たちによって句が追加されていった。ごく最近では、1957年に、獅子門32代目の高橋清斗（1880-1958）によって11基の新しい詩石が追加された。

放生池の向こう側には、もう一人の偉大な文学者、与謝野晶子（1878–1942）の記念碑がある。晶子は社会的に影響のある作家で歌人、フェミニスト、社会改革派であった。11世紀の日本の古典文学『源氏物語』の完訳を含む生涯に75以上の作品を出版した。1900年11月、編集者であり後には夫になった与謝野鉄幹（1873～1935）、そして歌人仲間の山川登美子（1879～1909）と一緒に永観堂を訪れた。当時、3人の歌人は情熱的な恋の三角関係にあったが、登美子はやがてお見合いのために家に帰ることを余儀なくされた。翌年の一月、晶子と鉄幹は公認の恋人同士で再び永観堂を訪れた。再訪時に晶子は次の歌を詠んだ。後にこの歌は彼女の最初の歌集「乱れ髪」に載せられた。

秋を三人（みたり）
椎の実なげし
鯉やいづこ
池の朝かぜ
手と手つめたき